

【特別寄稿】 新出尾崎雅嘉編『舶来書目』原本について

著者	山中 浩之
雑誌名	東アジア文化交渉研究 = Journal of East Asian cultural interaction studies
巻	8
ページ	1-21
発行年	2015-03-31
その他のタイトル	On the original Hakurai Shomoku, edited by Ozaki Masayosi
URL	http://hdl.handle.net/10112/9149

【特別寄稿】

新出尾崎雅嘉編『舶来書目』原本について

山中浩之

On the original Hakurai Shomoku, edited by Ozaki Masayoshi

Yamanaka Hiroyuki

As material related to Chinese imported literature in the Edo period, Hakurai Shomoku, edited by Ozaki Masayoshi, is considered to be one of the most important literary pieces. However, up to the present, only incomplete copies could be seen. However, I have been able to confirm the original. I intend to report on the original in its entirety, examine how Ozaki Masayoshi, known by the Japanese bibliographical introduction to Gunsho Ichiran, edited the work by looking at the then cultural exchange in the sciences and the arts, and examine what Ozaki Masayoshi was trying to aim at from this work

Keyword : 大庭脩 尾崎雅嘉 舶来書目 蕪葎堂 中川忠英

はじめに

江戸時代における輸入漢籍の研究については、大庭脩氏の『江戸時代における唐船持渡書の研究』、『江戸時代における中国文化受容の研究』に代表される一連の研究によってほぼ尽くされた感がある¹⁾。その中で用いられた資料で編纂された輸入書目のうち、後述の『舶来書目』と並んで重視されたものに尾崎雅嘉編『舶来書目』があった。しかし当時、本書の原本の行方がわからなくなっていたため、大庭氏は不完全な写本によって相当な労苦を注いでその全体を見通された。尾崎雅嘉は一般には本邦最初の和書の総合分類解題『群書一覽』をはじめ『百人一首一夕話』など主として和書・歌学関係の多くの著述のある学者として知られる。しかし『群書一覽』刊行時には、その漢籍部刊行をも予告しており、漢籍にも相当の知識と関心を有していたことはまちがいない。『舶来書目』は雅嘉のその面を示す輸入漢籍の目録であるだけにその原本の出現は待たれることであった。大庭氏も本書のことにしばしば言及し、その所在不明に残念の思いを致された。幸い、今ここに、その原本とみなされる書を偶目することを得

1) 大庭脩『江戸時代における唐船持渡書の研究』昭和42年3月、関西大学出版部。同氏『江戸時代における中国文化受容の研究』昭和59年6月、同朋舎出版。同氏『江戸時代の日中秘話』1980・5東方書店。同氏『漢籍輸入の文化史』1997。1、研文出版

た。本書の出現は輸入漢籍の研究にとっても、尾崎雅嘉研究にとっても願わしいことであろう。小稿では本書そのものの書誌および内容について報告を行い、輸入漢籍の先行書目との関係において本書はどのような位置を占めるものなのか、そして『舶来書目』編纂をなした当時の大坂の学問環境と書目をめぐる人的交流を考え、本書が尾崎雅嘉研究においてどのような視点を付加するものなのか、に言及できればと思う。

一 『舶来書目』と『舶載書目』

1 『舶来書目』の前提

はじめに『舶来書目』という書が輸入漢籍に関する資料のなかでどのような位置にある書なのかということに関わって、大庭氏の研究を踏まえておく必要がある。『舶来書目』は先行資料の上に成り立っているからである。大庭氏は持渡書に関する資料を二大別した上、さらに詳しく分類されたが、行論に係する範囲でやや簡略化して記しておこう。

第一次資料 貿易業務に関係して作成された資料

- ①「齋来書目」 積載書籍の目録で唐船から提出されるもの、現存分『持渡書』（以下『江戸時代における唐船持渡書の研究』を略記）に翻刻
- ②「大意書」 書物改役向井家によって作成された資料。向井家は長崎聖堂祭主で寛永十六年(1639)書物改に加わり、貞享二年(1685)長崎奉行直属の書物改役となり、以後世襲した。当初はおもにキリシタン関係書の検閲を中心としたが、次第に幕府買上書物のための内容解題の作成が主となる。宝暦六年(1756)からは新渡の書に限って記載。「大意書」はその解題であり、最も重要な資料といえる。現存分『持渡書』に翻刻。
- ③長崎会所取引時の諸帳簿
書籍元帳(書籍名と数量を書き上げたもの)、見帳(入札時の値踏み帳)、直組帳、落札帳これらについても現存分は『持渡書』に翻刻。

第二次資料 編纂されたもの

A. 刊本のあるもの

- ①『二酉洞』(元禄十二年刊、一色時棟編)
- ②『唐本類書考』(寛延四年刊)

B. 写本で伝わったもの

- ①『商舶載来書目』 向井元仲編 文化元年(1804)八月 五冊(国立国会図書館蔵)
元禄六年(1693)から享和三年(1803)までの新渡書物をいろは別にした上、さらに各項を年代順に配列したもの。どのような書物がいつ渡来したかがわかる重要資料。
ただし書名と数量のみで解題はない。『持渡書』に翻刻。
- ②『分類舶載書目通覧』 中村亮編 文化七年(1810)九月 二冊(内閣文庫蔵)

編者の識語によれば、長崎奉行中川忠英が向井家の記録に基づいて作成した『舶載書目通覧』五十六巻から書名・撰者を書き抜き分類したとされるもの。（関西大学東西学術研究所資料集7下に影印）

③『舶載書目』四十冊五十八巻（宮内庁書陵部蔵）

元禄七年（1694）から宝暦四年（1754）までの持渡書を収載。新渡書だけでなく再渡書も含み、各書の序・凡例・細目等を掲載し最も大部なもの（関西大学東西学術研究所資料集7、上下に影印）

大庭氏が持渡書に関する資料として調査研究に用いられた主要な資料は以上のようなものである。なかで注意されることは上記の中川忠英編『舶載書目通覧』五十六巻と『舶載書目』五十八巻との関係である。巻数が同数に近いこと、また分類がなされていないという書目としての体裁が類似していることから、同一本の可能性が示唆されていた²⁾。前者の『舶載書目通覧』は現存が確認されていず、また巻数や書名に小異がある事から、大庭氏自身も極めて近いものと見られながら、同一との断定は保留されている。そして尾崎雅嘉の『舶来書目』にかかわってもこの点は注意されるのであるが、のちにもう一度触れることにしたい。

なお大庭氏は『舶載書目』の編者について、それに見える蔵書印「澹寧齋蔵」から、「澹寧」と号した大坂の儒者飯岡義齋の旧蔵でその編になるものと見られている。飯岡義齋は頼山陽の外祖父として一部に知られる。しかし飯岡義齋はもと石田梅岩門下で、一時大坂の梅岩塾尊性堂を預かった人で、のち朱子学に転じたが、もっぱら篤行実践を貴び、博識はむしろその妨げになると見た人であり、歴大な輸入漢籍目録に強い関心を有したとは思われない。残される義齋関係資料（頼家所蔵杉ノ本文書）にもその関連資料はまったく見られないので、この「澹寧齋」は飯岡義齋とは別人であると考え³⁾。

2 『舶来書目』と『舶載書目』

さて大庭氏は『舶載書目』の調査と並行して、尾崎雅嘉編『舶来書目』の二種の写本を調査された。

『舶来書目』八冊	明治三十三年（1900）写	国立国会図書館蔵
『舶来書目鈔』八冊	大正四年（1915）写	京都大学附属図書館蔵

の二種である。国会本は『舶来書目』の巻四から十一までを筆写したもの。京大本は巻一と巻二前半は刊本『二酉洞』と『唐本類書考』という所蔵本なので省略し、巻三も『玉海』の序のみなので略し、『舶来書目』の巻二の内「続唐本類書考」「書籍名数唐本目録」を筆写したあと、「第四ヨリ第八ノ前半部マデ、又第九ヨリ第二十四マデハ書名ハ全部謄写、其他ノ項ハ大半抄略ス、第八ノ後半部ハ全部謄写ス」と凡例で述べているように、完全筆写ではないが、一応収載書名は確認できるものとなっている。実際

2) 長澤規久也「舶載書目」『書誌学論考』昭和12年所収

3) 拙稿「尊性堂と飯岡義齋——梅岩学の普及と転回と——」（『石門心学の思想』2006、ペリかん社）

見てみると、そのとおりで書名・巻冊数・著編者名だけか、あるいはそれに序の年記と渡来年のみが写されているものがほとんどである。国会本は巻四から十一までの全体を写すが、他はまったく欠けており、京大本はほぼ全体をカバーするものの内容的省略が多い。いずれも不完全本であり、大庭氏はこの二種の写本から『舶来書目』というものがどういう書目であるのか、「理解できるようになるまでに要した長い期間の辛苦」があったと述べられている⁴⁾。そのさい、参考になったものとして京大本に付された解題があった。すでに大庭氏の著書にも掲載されているものであるが、以前に松村文海堂所蔵であった原本を借覧筆写した専門司書の言として貴重で適確な記述だと思われるので、長文であるが、全文引いておきたい。

- 一 舶来書目（二五冊）ハ尾崎雅嘉ノ編ニシテ元禄以降支那ヨリ舶来セシ書目ヲ収録ス現ニ大阪市松村九兵衛（文海堂）ノ所蔵ナリ
- 一 「何年何番船ニ持来」「何々ノ御内用」等ト歴史的ニ記載セルヲ以テ同ジ書物ノ幾回モ舶来セルモノハ再三重出セルモノ往々ニシテアリト雖モ本書目ノ価値ハ此点ニ存スルナリ仍テ今主トシテ歴史的参考資料トシテ必要ナル部分ヲ抄録シ全部ノ謄写ニ及バズ但書名ハ一モ省略セズ（叢書類ニシテ本学ニ所蔵セルモノハソノ内容ノ書名ヲ省略ス）
- 一 間々解題ヲセルモノアレドモ多クハ単ニ序文凡例等ノ全文ヲ掲ゲ又第何巻ニハ何々ヲ載ス等ノコトヲ細記セルニ過ギズ従ツテ紙数ハ頗ル多ケレド採録セル書目ノ部数ニ至テハ割合ニ僅少ナリ
- 一 本書目ハ所蔵者ノ所記ニヨレバ尾崎雅嘉ノ自筆ナリト云フ大阪名家著述目録編輯者亦之ヲ是認シ其一部ノ写真ヲ掲載セリ今之ヲ精細ニ調査セルニ誤字等甚多ク又筆蹟ニモ三四ノ異趣アリ誤字ノ如キモ例ヘバ「鑿」ノ字ヲ「臨」「金」ノ二字ニ分ケ書セルガ類鮮カラズ写真ニ撮リシ部分ト同ジ筆蹟ノ部ニスラ猶文字文句ノ誤謬散見シ人ヲシテ雅嘉ノ自筆タルヲ疑ハシムルモノアリ彼是ヲ綜合シテ推測セバ或ハ一部ハ自筆ナランモ十中八九部三四人ノ筆写セシモノナランカ
- 一 顕著ナラザル書人名地名等ニ「波」ヲ「坡」「宣」ヲ「宜」「柳」を「聊」ト書ケルモノアルモ今之ヲ更正セズ他ニ誤字多キヨリ推セバ或ハ此類ノ誤り少カラザランカ

大正四年三月十八日

京都帝国大学図書館

本書の価値をどの点に見、なぜ全巻筆写しなかったかの判断、また筆写者の混交の指摘など漢籍や写本の扱いに慣れた司書の目が光っているといえよう。また同じ書物であっても再三の渡来についても載せている点を評価しており、その点は次の『舶載書目』との類似を予想させるものであった。

大庭氏は『舶来書目』が『舶載書目』と密接な関係を有する書だということを写本調査の過程で看取されたと思われる。氏は国会本と京大本はともに不完全本であるが、両者合わせればほぼ全体の構成が復元できることから、それを基として、『舶載書目』との対照を行われた。両書ともまったく分類がなされていず、どこにどの書が収載されているかを見出すだけでも容易でなく、そのうえ膨大な書目なのでその対照作業はかなり煩雑であったと拝察される。両書には処々に渡来年等が記されているが、それが

4) 前掲『江戸時代における中国文化受容の研究』177頁

ない部分もあり、それについてはさらにいろは別・年代順記載の『商舶載来書目』を参照することによって、渡来年あるいは書物改めの年次を特定することが可能で、『舶載書目』『舶来書目』のそれぞれの巻に含まれる書目がいつのものであり、それが両書の何巻に収録されているかを、実に丹念な対照確認作業を通して確定されていったのである。そうして作成された「舶来書目・舶載書目内容対比表」（後掲の補訂表参照）は労苦の結晶とも言える成果であった。これによって大庭氏は見当のつきかねた書目を「長い辛苦」の末、明確にその性格を見通されたのである。すなわちそれは『舶来書目』とは『舶載書目』を基に筆写作成されたものであったということである。ただし筆写したにしては両書において内容の前後関係がかなり食い違っていること、収録書の一部に出入があること、また書名のちがいがあることなど、やや不可解な点が残ることを言い添えられている。そのうえで、尾崎雅嘉の『舶来書目』は『舶載書目』を写した上、既刊の書目二種を加え、さらに宝暦四年以後の『舶載書目』には記載のない時期の渡来書について、どこかから資料を入手し、寛政文化期の雅嘉編纂時点までの新たな資料を加えて『舶来書目』は編まれたものとされた。つまり雅嘉は文化期までのすべての渡来漢籍の書目を編纂しようとしたのだと。これは丹念な作業によって得られた見事な洞察であり、指摘であった。基本的には現在もその通りといえるのであるが、微妙な違いの中に、大事なことが隠されているともいえ、たとえば雅嘉が見ていたのは本当に『舶載書目』であったのか、また大庭氏が触れておられない二十五冊目は一体何かということを含め、次に原本を紹介報告し、雅嘉の編纂した『舶来書目』がどのようなものであり、どのような意図を持ってなされたものか考え、また『舶載書目』との関係を確かめなおしてみたい。

二 新出『舶来書目』の書誌と内容

1 原本と巻一について

尾崎雅嘉編『舶来書目』の原本とみなされるものは、現在大阪大谷大学図書館所蔵で、全二十五冊である。この書を見出しえたきっかけは、井上智勝氏が江戸期大坂の書肆敦賀屋（松村氏）九兵衛家の家法書を紹介されたさい⁵⁾、敦賀屋の出版目録らしきものは大阪大谷大学に保管されているという御子孫の言に触れておられるのを見たことであった。それで図書館にうかがい調べてもらったところ、図書館蔵書とは異なる別扱いになっており、閲覧したところ、それは敦賀屋の出版目録ではなく、尾崎雅嘉の『舶来書目』だったのである。これはまったく予想外のことであった。しかしもちろん尾崎雅嘉は著名な学者であり、『舶来書目』という書名はたしか大庭氏の著書で見た記憶がよみがえった。それで早速大庭氏の著書を読み直し、『舶来書目』にいたる渡来書資料の基本的な流れを要約したのが前章であった。

それで本章ではまず『舶来書目』原本について詳細に見ていきたい。一つの木箱に全二十五冊が収められているが、他に版本『群書一覽』全六冊の内巻二・巻三の二冊が含まれている（後掲写真1）。木箱の大きさから見て、もとは『群書一覽』も全六冊収納されていたのではないかと想像される。それによって木箱はほぼびたりと填まるからである。つまり『群書一覽』和書部・漢籍部揃というつもりではな

5) 井上智勝「文海堂敦賀屋書店先祖傳來申置主人以下掟書——大坂書肆敦賀屋九兵衛家の店方掟書と店方年中行事——」大阪歴史博物館研究紀要9、平成23年3月

かったかと思われる。『群書一覽』のことは今はおき、『舶来書目』についてみていこう。

『舶来書目』の形態は第一冊から二十五冊まで全巻同じで、横十六・〇糎、縦二十二・八糎、袋綴。表紙も全巻、藍色表紙。保存状態は良好である。題簽は一～二十四冊は表紙左上に貼題簽で「舶来書目 一（～廿四）」とあるが、貼題簽の枠は印刷されており、文字は手書きである。二十五冊目は「舶来書目 地理部」と貼題簽はなく打付け書になっている。二十五冊目がやや扱いが異なっている点、後述するが注意されよう。

さて巻一は表紙右上に「文海堂秘蔵所/有品禁門外出」と二行に書き付けた貼紙がある（写真2）。文海堂は先に触れたように、近世大坂の代表的書肆敦賀屋（松村氏）九兵衛であり、いつからかは知られないが、近代以降長きにわたる所蔵者であった。大正四年（1915）京大で写された原本がこれであることは明らかである。一丁オモテに「非売品 尾崎雅嘉大人自筆印」と書付があり、印は「松村之印」とみえ、これも前者と同じ筆跡であり、文海堂松村氏によるものと見られる（写真3）。

三丁からは版本『二酉洞』がそのまま用いられ、六十七丁（『説郛』九十八）まで続き、その後は手写となる。手写用紙は無辺無界、以下全巻同じ。なお『二酉洞』は元禄十二年（1699）、一色時棟によって最も早く刊行された漢籍叢書目録で、この巻の前半はその版本をそのまま利用した形になっている。全巻において丁数は記されないが、参考のため数えたところを記すと巻一は表紙・遊紙とも一三七丁、墨付一三四丁。

本巻の筆写者はだれであろうか。京大本解題にも述べられていたように、たしかに複数の手による筆写であるとみえる。筆写者名は全巻を通してどこにも記載はない。それがどういう人であるかは定めがたい。ただし、本巻には朱の書入れが夥しくある。それはすべて同じ人の手で書かれている。とくに『二酉洞』に欠けていたり、誤っている巻数・冊数がほぼ全体にわたって朱書補訂されているほか、医書の部では巻数等のほか著者名の書入れなど夥しい（写真4）。そして注意してみれば、たとえば『経解』（通志堂経解）という康熙一九年の刊本について「甲戌新渡」の朱書が見える。甲戌すなわち元禄七年（1694）に渡来したものであることを示す書入れである。また『正統稗海』のところには「以上振鷺堂蔵板七十四種ノ本ヲ以テ訂正スルトコロナリ」の朱書がある。さらに医書の部には「按ずるに呉勉学正脈所収活法機要・医学發明・醫墨元戎の書皆全本にあらず。杜忠敬拔粹方的一種歟」というような編者の「按」を記した書き入れも見られる。これらの朱書はできるだけ叢書原本を確かめ、また渡来書資料を見たものでなければ書き得ない性格のものである。そのような書目としての正確さを求めようとしたのは他ならぬ本書の編纂者雅嘉その人であったとしか考えることができない。この朱書こそ雅嘉自筆部分であると考えられるのではなかろうか。京大本はこの巻を筆写していないが、「校正、補修、考証等ヲ加フ（尾崎雅嘉ノ筆ナランカ）」と注記を加えている。そうしてみると医書の部の本文も同筆である事がわかる。一時医業にも携わったらしい雅嘉は医書への関心が高かったように思われる。

2 巻二～巻五について

巻二は『唐本類書考』（六丁～一一三丁）・『続唐本類書考』（一一四丁～一三七丁）・『書籍名数唐本目録』（一三八丁～一四五丁）という三種類の編纂書を取める。『唐本類書考』上中下三巻三冊は寛延四年（1751）七月、「平安書林向榮堂主人」（山田三郎兵衛）が『二酉洞』が「甚だ疎略」であるのを補訂しよ

うとして編集刊行した本の写しである。『続唐本類書考』は写本として存在していたようで、その編者・成立も不明であり、『国書総目録』にもみえない。その編者とみられる「西山房主人」は、その凡例で『二酉洞』が集めたのは叢書であって類書ではないことをいい、清の「姦商」が舶載したものには抜粋本や贋本が多く、真本ではない可能性多いことを指摘し、汲古閣主人毛晋が善本を集めて『津逮秘書』や『十三經注疏』などの刊行事業をとおして善本を後世に伝えたことを称える。雅嘉にとっても我意を得たりという思いを抱かせるものであったのだろう。『知不足齋叢書』や『武英殿聚珍版書』等を含む。三番目の「書籍名数唐本目録」は書名に数量が付いた書の目録である。本書も他には知られないものであるが、天明三年刊中村治重『新編書籍名数』三冊から抄出したものかもしれない。「夏茂卿三種」「琴書三種」というように数種の本が合わさった形の書を列挙したものである。おそらく叢書に準じたものとして収められたのであろう。なおここまでは編纂された漢籍叢書目録の写しであり、『唐本類書考』以外の二書は他に知られないものであったので京大本にも筆写されている。

巻三は『補刊玉海』の序のみを筆写したものである（一～二八丁）。『玉海』は宋の王应麟の撰で、詩料のために群書を類集したもので、二一門・二四〇余類、二〇〇巻に及ぶ宋代類書の代表とされるが、これはその補刊で乾隆三年（1738）序である。大庭氏は「商舶載来書目」によって宝永七年（1710）渡来書とされているが⁶⁾、序の年月からみてもそれ以後であろう。この序だけでなぜ一巻分当てられたのかはわからない。毎葉五行十一字という大字で書かれており、筆写の様態も他巻と異なる。ここまでは、いつどのような書物が日本に渡来したかを示す持渡書の資料そのものではない。以下、巻四以降二四巻までがそれに相当する。

巻四は冒頭の「桂山読伝習録弁 二本四巻」の肩の所に「宝永四丁亥歳改」とあり、明らかに宝永四年（1707）に書物改が行われた書であることを示す。そしてその下に朱書で「十 十一」と書かれている。この数字が何を意味するものか、最初はわからなかった。しかし以下、ほとんどの巻の一丁オモテ右下に、同様な数字の朱書がある。これは実は、しばらく見比べていくことによって、その内容が収録される『舶載書目』の巻数を記したものであることが知られた。宝永四年改め分は『舶載書目』では第十巻に収録されていることを示している。そして「十一」も記されているのでみてゆくと、宝永五年・六年分の一部もこの巻に含まれていることが確認される。すなわちこの巻四には『舶載書目』では第十巻・十一巻に含まれる宝永四・五・六年渡来あるいは改めの書の一部が収録されていることとなる。筆写の内容は基本的に『舶載書目』と同じく、書名・巻冊数・著編者名をまず記し、つぎに序や凡例、細目を写す。中には『舶載書目』よりも省略された筆写である部分がみられる。

巻五はさらに複雑な構成になっている。最初に「欽定四庫全書提要無板書目」（一～三丁）があり、つぎに「御書楼珍藏無板書目」（四～一〇丁）が筆写されている。これらはともに寛政文化期渡来のもので幕府が買い上げたものであるが、宝暦四年までしか載せない『舶載書目』には存在しないものである。雅嘉はどこかで独自に資料を入手したのである。この二書に関しては大庭氏が「篠崎小竹旧蔵の『欽定四庫全書拾遺目録』について」という論文のなかで、詳記されているので参照されたい⁷⁾。つぎに正徳三

6) 『江戸時代における中国文化受容の研究』177ページ

7) 『近世大坂藝文叢談』昭和48年3月、中尾松泉堂、所収

年の渡来書が載る（一一～二九丁）。やはり右下に「十七 十八」と朱書がある。続いて正徳四年分（三〇丁～）そして享保四年（三三丁～）享保五年（三七丁～）分があり、さらに寛保元年（四二丁～）・元文四年（五三丁～五六丁）渡来分が含まれている。結局、この巻五にははじめの二書の外は舶載書目十七・十八巻と、朱書は見えないが三五・四九巻に収録されるものの一部が含まれるということになる。この各年まちまちで、煩雑な筆写のしかたは不可解としか言いようがない。なぜこのような複雑な筆写構成になったのだろうか。『舶載書目』をそのまま筆写していればこのような形にはならなかったと思えるからである。この点についてはのちにもう一度推察することにしよう。

3 巻六・七および巻八以降について

さて巻六に収録されるのは『舶載書目』にはまったくみえないものである。およそ60種余の書が載る。中に渡来年等は記されていないが、『商舶齋来書目』によって検すると、元禄～享保期新渡の再渡来本もみえるが、清代乾隆帝期にあたる宝暦以降寛政期の新渡来書が多い。一々書名を挙げることはここでは措くが、なかに『二倫行実』（正徳戊寅序）『新增類合』（万暦四年序）という「朝鮮本」と注記した書が見える（写真5）。筆写されている両書の序によれば前者は忠臣孝子烈婦の行実を集めたもの、後者は経史子集の緊要の字の本義を明らかにしようとした書である。また同じく『要務彙編』（康熙五十七年序）という「琉球本」と注記された書が載る。ともに渡来年はわからないが、朝鮮本・琉球本が直接長崎経由で輸入されたとは思われない⁸⁾。とすると長崎奉行や向井氏とは別に作成された資料によったものである可能性が生じる。薩摩・琉球を通して中国書を注文したという兼葭堂との関係もありえよう⁹⁾。ともあれ、この巻六は雅嘉が独自に入手した持渡書資料で、本書以外他にみえない資料であり、宝暦～寛政期の渡来書を知ることができるものである。

巻七についても、大庭氏はその全体が「舶載書目」には見えない寛政・文化期以後の雅嘉独自の持渡書資料とみなされた。たしかに前半はそうであるが、後半はそうではない。前半には『上用欽定古今圖書集成』六百套一万本（宝暦庚辰（十年）新渡 銅活字版）、『知不足齋叢書』（安永己亥（八）年新渡、同続刻寛政九年新渡）、『武英殿聚珍版書』（安永庚子（九年）五番船）、『大清会典』（康熙二十五年奉勅、雍正十年序）、『佩文齋詠物詩選』（康熙四十五年序）など宝暦～寛政期に渡来した大部で重厚な叢書や江戸期と同時代の清朝学芸文化を示す書が比較的多いようである。享和二年（1802）『弘簡録』が最も新しい渡来書として見える。またそれは雅嘉の本書編集作業の時期を示唆するものようである。本巻は三五丁までは以上のような新たな渡来書についての内容であるが、三十六丁以降には享保十五、十六、十七、十九年の「書目校閲写」とする筆写が見られる。そのはじめには「三十八九四十一二」の朱書があり、これは『舶載書目』三十八・三十九・四十一・四十二巻をさしているものと思われる。したがってこの巻七は雅嘉が寛政期に独自に入手した資料を前半に置き、そのあとは『舶載書目』の一部を付加したものとなっている。

8) 田代和生「近世前期朝鮮医薬の受容と対馬藩——医学書・薬種・医師について——」（『歴史の中の病と医学』所収、1997 思文閣出版）

9) 大庭脩『持渡書の研究』86頁

なお注意されることは、『人鏡陽秋』という明の汪廷訥という人が編んだ書に「紀藩蔵本」の注記があることである。これは雅嘉が紀州藩蔵本を実際に見たか、所蔵されているという確実な情報を得て書き入れたものであろう。また同じく『程幼博墨苑』（六套四十八本）という明の程幼博が著した書について「古梅園蔵」と注記されている（写真6）。これは奈良の著名な墨屋で、中国の墨や墨跡にも造詣深かった古梅園松井氏の蔵本を見た可能性が高い。古梅園には現在も『程氏墨苑』二十四巻が蔵されているが、これであるかもしれない。古梅園は直接長崎に趣き来舶清人と交流し、また朝鮮通信使、琉球人とも親交を重ね、東アジアという世界で墨を採求しようとした家である¹⁰⁾。雅嘉はもちろん古梅園を知っていたであろう。巻六・七とも同筆であり、字体から巻一の書き入れと同筆であり雅嘉筆の可能性が高い。

巻八以下巻二十三までは、『舶載書目』に対応する内容がほぼ順を追って収載されており、内容は省いて、『舶来書目』の巻数と収録する書の渡来年あるいは改めの行われた年、および『舶来書目』に朱書される『舶載書目』とみられる底本の巻数記載のみをここでは示して置く。なお後掲の「舶来書目・舶載書目内容対比表補訂」をも参照されたい。

巻八（四八丁）	元禄七年、同十二年	一丁オに「一 二」
巻九（五七丁）	元禄十二年、同十三年、同十四年、同十五年	一丁オに「三四五」
巻十（四九丁）	元禄十五年、同十六年、 元禄七年、同八年、同九年	一丁オに「六」
巻十一（四一丁）	宝永二年、同四年	一丁オに「七八九」
巻十二（四七丁）	宝永六年、同七年	一丁オに「十二」
巻十三（五三丁）	正徳元年	一丁オに「十三十四」
巻十四（四四丁）	正徳二年	一丁オに「十五十六」
巻十五（四四丁）	享保六年 元文五年（舶載書目四十六巻、大庭氏） 宝永四年・同五年（舶載書目十巻、大庭氏）	一丁オに「十九二十」
巻十六（五二丁）	享保九年	一丁オに「二十一」
巻十七（四〇丁）	享保十年 享保二十一年	一丁オに「廿二 廿三 廿四」
巻十八（五七丁）	享保十一年 享保十二年	一丁オに「二十五二十六二十七」
巻十九（六〇丁）	享保十二年 享保十三年	一丁オに「廿八九三十三十一」
巻廿（四一丁）	享保十三年 享保十五年・同十六年	一丁オに「三十二」 十四丁に「三十三四五六」
巻廿一（ ）	享保十六年、享保八年、享保七年 享保十九年、享保二十年、「享保十八丑年廿八番船持渡之内」の下に	一丁オニ「三十七」 「四十三」
巻廿二（六〇丁）	元文二年	一丁オに「四十四」

10) 松尾良樹「古梅園の造墨と文化交流」『近世文芸』84号、2006.7

元文四年・五年	三十三丁オに「四十五」
卷廿三（六三丁）元文五年	一丁オに「四十六七」
寛保元年、二年、三年、延享二年、三年、五年	十二丁オに「四十九 五十 五十一 五十二」

4 卷二十四と別巻について

以上、卷八から卷二十三までは『舶載書目』をそのまま筆写したものと見える。それぞれの巻の一丁オモチをはじめ、中の各所に朱書で書かれた数字すなわち『舶載書目』の巻数に含まれる内容と、『舶来書目』の内容は合致しており、この分は『舶来書目』は『舶載書目』をそのまま写しているとは見えな。ところが、『舶来書目』卷二十四は微妙な違いがある。一丁オに「五十三四」とあり、これは『舶載書目』卷五十三・五十四で延享四・寛延元年分を含み、『舶来書目』も同様である。十六丁目にまた「五十四」とあり、『舶載書目』五十四は寛延元年分であるが、『舶来書目』では寛延二年・寛延四年分の内容になっている。これは『舶載書目』では五十五・五十六巻に相当する内容である。そして『舶来書目』卷二十四の二十九丁目には「五十五終」とあり（写真7）、寛延二年・同四年と宝暦四年分が収録されている。これは『舶載書目』では五十六～五十八巻に収録されるものである。つまり、『舶載書目』五十三・五十四・五十五・五十六・五十七・五十八巻の六巻に収録される内容が、『舶来書目』では卷二十四にすべて収録され、雅嘉が見た本は五十四巻に寛延二・寛延四年分を収め、五十五巻に宝暦四年分を収めて終了しているものだったことを示している。ここまで『舶載書目』の対応する巻数を一卷一卷確かめるように朱書してきた雅嘉がこの最終巻で間違えるようなことはないであろう。「五十五終」という朱書は雅嘉が見た本はそこで終わっていたということである。そうすると雅嘉が見ていた本は今まで参照してきた、この宮内庁本『舶載書目』と同じものであったのかという点について疑問が生じざるを得ない。雅嘉が見ていた本は『舶載書目』と基本的に共通する本であったが、この宮内庁本『舶載書目』あるいはそれと同一の写本ではなかったという可能性が浮上する。それでは雅嘉が見ていた本はどういうものであったのかが問題となるが、それを見きわめることは大変にむずかしい。あとでもう一度考えたい。

さて、実はもうひとつ大きな問題がある。それは『舶来書目』二十五冊目の問題である。如上のように『舶来書目』は二十四冊で完了している。それではこの二十五冊目とは何であろうか。京大写本では二十五冊目は「地理部」とし、『日下舊聞』の巻冊数と著者を記すのみでその他は省略されている。大庭氏もまた触れるところがない。以下これを別巻とよぶことにするが、それははじめにもふれたように外題に「舶来書目 地理部」と打ち付けに書かれており、内題には「舶来書目地理部卷之一」と記されている（写真8）。明らかに二十四巻までとは異なった部類編纂になっており、その地理部の一冊目で四七丁ある。最初に見える書は清朱彝尊編『日下舊聞』四十二巻である。本書は北京に関する旧聞を諸書から秩序立てて編集したものである。「宝暦七年渡来」の注記がある。おそらく首都北京に関する網羅的な書として巻頭に置かれたのであろう。数種類の序や目録を写した後、本書に用いられた千六百余种の引用書目がすべて写し取られている。一定の事項に関して膨大な書を参照して整った分類のなされている本書は、雅嘉のめざしていた学問のかたちとしても尊重されたように思われる。本書が四四丁まであり、

新出尾崎雅嘉編「舶来書目」原本について（山中）

舶来書目・舶載書目等内容対比表〈補訂〉

卷数	舶来書目			舶載書目	卷数朱書	備考 (収載書の渡来・校閲年等書入その他)
	原本	京大本	国会本	冊(巻)		
卷1	二酉洞	無	無	無		1丁～元禄十二年刊本、68丁以降手 写、全体に朱書補訂多し
卷2	唐本類書考	無	無	無		1～111丁
	続唐本類書考	第1冊	無	無		112～135丁
	書籍名数唐本目録	第1冊	無	無		136～143丁
卷3	〈補刊〉玉海序 (1738)	無	無	無		
卷4	宝永4年	第1冊	第1冊	6(10)	1丁オ「十 十一」	1丁オ「宝永四丁亥歳改 桂山読伝習 録 二本四巻」
	〈宝永五年〉	同上	同上			
	〈宝永六年〉	同上	同上			
卷5	欽定四庫全書提要 無板書目	同上	第2冊	無		1～3丁
	御書楼珍藏無板書 目	同上	同上	無		4～10丁
	正徳3年	同上	同上	11(17)	11丁オ「十七十八」	11丁「正徳三年」
	〈正徳4年〉	同上	同上			30丁オ「正徳四年」
	享保4年	同上	同上	11(17)		33丁オ「享保四年 蔵経」
	享保5年	同上	同上	12(18)		37丁オ「庚子享保五年 測鑑類函」
	〈寛保元年〉	同上	同上			42丁オ「寛保元年酉六番船 蔵経 法 華経」
	〈元文四年〉	同上	同上			53丁ウ「元文四年渡来 楽善堂全集 二 套二十四本 乾隆帝御製ノ詩文集ナリ」
卷6	(寛政及びそれ以後)	第2冊	第3冊	無	無	本文参照
卷7	(寛政及びそれ以後)	第2冊	第4冊	無	無	本文参照
	〈享保15・16・ 17・19年〉	同上	同上		38丁「三十八九四十一 二」	
卷8	元禄7年	第3冊	第5冊	1(1,2,3)	1丁オ「一二」	
	元禄12年	同上	同上	同上		28丁オ「元禄十二年書目校閲写 四書 大全」
卷9	元禄12年	第4冊	第6冊	1(1,2,3)	1丁オ「三四五」	1丁ウ「元禄十二年校改」
	元禄13年	同上	同上	2(4,5)		17丁オ「元禄年中書目校閲写」
	元禄14年	同上	同上			32丁オ「元禄十四年辛巳」43丁オ「元 禄十四年書目校閲写」
	元禄15年	同上	同上			
卷10	元禄15年	第5冊	第7冊	3(6)	1丁オ「六」	
	元禄16年	同上	同上			22丁ウ「元禄十二年癸未」
	元禄7年	同上	同上			
	元禄8年	同上	同上			39丁ウ「元禄第八乙亥夏廿一番船」、41 丁ウ「公義目録ニモアリ 彙聚単方」
	元禄9年	同上	同上			43丁ウ「元禄九丙子春番船校閲」
	元禄10年	同上	同上			
卷11	宝永2年・3年	同上	第8冊	4(7・8)	1丁オ「七八九」	7丁オ「宝永年中書目校閲写 柳文廟 公集」
		同上	同上	5(9)		29丁ウ「宝永三年 重訂本草綱目」

舶来書目				舶載書目	卷数朱書	備考 (収載書の渡来・校閲年等書入その他)
卷数	原本	京大本	国会本	冊(巻)		
						40丁ウ「承応元年目録有女科百病問答四本疑此書乎 女科百問 一部四本四巻」
卷12	宝永6年	第5冊	無	7 (11)	1丁オ「十二」	1～18丁は舶載書目11巻に同じ、18丁以降は同書12巻に同じ、ただし省略あり
	宝永7年	同上	無	8 (12)		
卷13	正徳元年	第6冊	無	9 (13・14)	1丁オ「十三十四」	35丁オ「蘇文忠先生□恵全集 四本四巻 宝永四年記」トアリ
卷14	正徳2年	同上	無	10 (15・16)	1丁オ「十五十六」	9丁オ「天工開物 元禄十四辛巳歳記之」「立節齋印譜 宝永三年乙酉記之」
	<享保3年>	同上	無			33丁ウ「四書人物備考 享保三年持来本有り」
卷15	享保6年	同上	無	13	1丁オ「十九二十」	18丁ウ「享保六年書目校閲写」トアリ
	元文5年	同上	無	32 (46)		27丁オ楽書について「享保乙巳(十年)六番船持渡り書ト同シ」トアリ
						37丁オ「元文五年興福寺寄進蔵経之内続蔵目録 続蔵経」トアリ
	宝永4・5年	同上	無	6 (10)		
卷16	享保9年	第7冊	無	14 (21)	1丁オ「二十一」	1丁オ「甲辰書籍控 享保九年三番船四書剛徹直解」トアリ
卷17	享保10年	同上	無	15 (22)	1丁オ「廿二廿三廿四」	1丁オ「享保十年乙巳六番船 笠翁詩韻 朱来章持本」
	享保11年	同上	無	16 (23・24)		16丁オ「享保十一年 台州府志」
卷18	享保11年	同上	無	17 (25)	1丁オ「二十五二十六二十七」	1丁「午三十六番持 古文易知録」
	享保11年	同上	無	18 (26)		15丁オ「享保十一年書目 五□類編」
	享保12年	同上	無	19 (27)		42丁オ「享保十二年書目校閲写 二十番船 御用書物 七国孫龐關志演義」
						47丁ウ「丁未二十番南京寺送書之内程幼博墨苑 廿冊十二巻」
卷19	享保12年	第7冊	無	20 (28・29)	1丁オ「廿八九三十三十一」	1丁オ「未 二番船持用 小山小令選 一部二本」
	享保13年	同上	無	21 (30・31)		6丁オ「未三番船持用 歴朝通鑑韻書 一部廿二巻八本」
						14丁ウ「享保十二年未廿七番船 文法入門」
						59丁「未十一番船持用 享保十二年詩識名解」
						73丁ウ「享保十三年書目 錦香亭小伝 一部八本」
卷20	享保13年	第8冊	無	22 (32)	1丁オ「三十二」	14丁オ「享保十三年書目校閲」
	享保13年	同上	無	23 (33・34)	14丁「三十三四五六」	24丁オ「享保十四年校」
	享保15・16年	同上	無	24 (35・36)		30丁ウ「享保十五年」
						36丁オ「享保十六云々」
卷21	享保16年	同上	無	25 (37)	1丁オ「三十七」	1丁オ「享保十六年 佩文齋書画譜」
	享保8年	同上	無	29 (43)		4丁オ「巡城録二十本 享保八年癸卯興福寺竺庵帶來」トアリ

新出尾崎雅嘉編「舶来書目」原本について（山中）

舶来書目				舶載書目	卷数朱書	備考 (収載書の渡来・校閲年等書入その他)
卷数	原本	京大本	国会本	冊(巻)		
	享保7年	同上	無	同上		18丁オ「唐詩貫珠箋二十四本 享保七年壬寅」
	享保19年	同上	無	同上	26丁オ「四十三」	26丁オ「説鈴十四本 享保十八年丑年廿八番船持渡之内」トアリ
	享保20年	同上	無	同上		
	享保21年	同上	無	同上		「享保二十一年正月鑑閣 經史全書六本」「享保二十一年圖書集成 百六十本」
	元文1・2・3年	同上	無	同上		「元文元年辰十月 文昌帝君陰騭文式訓 二本」
卷22	元文2年	第8冊	無	30(44)	1丁オ「四十四」	1丁「元文二年巳四番 重刊十七史詳説」
	元文4・5年	同上	無	31(35)	33丁ニ「四十五」(ママ)	33丁オ「元文四年未番船 唐詩解八本」
		同上				44丁ウ「萩原伯州公御内用 資治通鑑一部十三套百本」トアリ
卷23	元文5年	同上	無	32(46)	1丁オ「四十六七」	1丁オ「未六番船送書目録 景岳全書一部四套二十四本六十四巻」
						6丁オ「元文五年申六番船 礼書 一部四套二十四本百五十巻」
	寛保1年	同上	無	35(49・50)	「四十九五十五十一五十二」	12丁オ「寛保元 透初堂集 一部二套十六本」
	寛保2年	同上	無			14丁オ「寛保二年壬戌四月 萩原伯州公御内用 戌三番船」
	寛保3年	同上	無			15丁ウ「寛保三年 亥三番船 四書集註 一套五本 乾隆四年序」
	延享2・3・5年	同上	無	36(51・52)		27丁オ「延享貳乙丑年二番船持渡 詩文長箋」
						「同五年辰三番船持渡 御医師詠 説文長箋 三十二本」
卷24	延享4年	同上	無	37(53)	1丁オ「五十三四」	1丁オ「延享四丁卯年一番船持渡 四書編 一部八套六十四本百七十七巻」
	〈寛延元年〉	同上	無	〈54〉		
	寛延2年	同上	無	39(55・56)	16丁オ「五十四」	
					29丁オ「五十五終」	29丁オ「辰七番船 寛延二年校閲 聖諭像解二十本」
	寛延4年	同上	無	同上		32丁ウ「寛延四年未四月 午七番船同九番船同十番船持渡書物之覚」
	宝暦4年	同上	無	40(57・58)		36丁オ「宝暦甲戌年九番船持渡 小説三十部之控」
						47丁オ「漢魏叢書 宝暦四甲戌年」
別巻	〈地理部巻一〉	同上	無			宝暦七年渡来「日下旧聞」、裏表紙見返し内側に「舶来書目 法帖部巻六」の書付あり

注1 本表は大庭氏作成の「舶来書目・舶載書目内容対比表」を補訂追加したものである。

2 「原本」項目の年号はその巻に収載される書の渡来年あるいは書物改の年を示す。〈 〉を付した分は追加分。

3 「卷数朱書」は舶来書目原本に朱書されている底本の巻数。

4 「備考欄」には舶来書目原本の処々にみえる収載書の渡来年および校閲年の書き入れの一部を示した。

そのあとは『宸垣識略』（清乾隆戊申1788序）十六巻の序・例言・目録が四七丁の終りまで写されている。本書は『日下舊聞』の欠を補ったもので、ここにおかれたのであろう。つまりこの別巻の存在は二十四巻までとは異なり、別に分類した形での『舶来書目』を編纂しようとしてつたことを示すものと考えられるのである。その点をもうひとつ示すものがある。それはこの別巻裏表紙見返し部分一葉の袋とじ内側につぎの記載が見えることである。

「舶来書目 法帖部卷之六
梁國治續千字文 楷書 一帖
董恩白先生法書 隸」

とみえ、そのあと「天覆地載云々」の三行ほどの文が見える。これはわずかな証跡ではあるが、雅嘉は法帖部という部立てを行ない、すでに巻六までは作成していたことを想定させるものである。この点は持渡書資料として新しく何かを加えるものではないが、尾崎雅嘉研究にとっては重要なことと思われる。すなわちこの別巻一冊は雅嘉が『舶来書目』を編集した上で、それを分類しなおして『群書一覽』の漢籍部作成に着手しつつあったことを示すものだからからである。

以上、やや煩雑にならざるを得なかったが、新出『舶来書目』についての報告である。大庭氏が作成された「舶来書目・舶載書目内容対比表」に以上の新出原本の内容を加えた補訂表を作成して示しておきたい。尾崎雅嘉は江戸期に渡来した漢籍の総合的な書目を作成しようとして、そのもっとも詳細な記述を有する『舶載書目』あるいは同種の資料を、何らかのルートを通して筆写し、それに含まれないそれ以前刊行の編纂書を加えたうえ、宝暦～寛政期の資料を独自に入手して、雅嘉当時までの全舶来書目を網羅しようとしたのである。しかし、それは分類されていない生なデータであり、このままの形ではどういう書物がどこにあるか見当がつかず、書目としては大変利用しにくいものである。そこで『群書一覽』と同じく、内容分類を行ない、部立てによる再編成を企図し（群書一覽漢籍部）、一定のところまで進めたが、完成するに至らなかったものと考えられるのである。

それではつぎに、雅嘉はいつころ、どのような交流を通してどのような資料を入手したのか、またその伝来等について、わずかな手がかりしかないが、検討しておきたい。

三 尾崎雅嘉と兼葭堂と中川忠英

尾崎雅嘉についての伝や『群書一覽』等の研究については管宗次氏によって最も精力的に行われている¹¹⁾。本稿の関心からはとくに『群書一覽』作成に兼葭堂蔵書が多く活用されていることが『群書一覽』中の借覽注記の調査によって明らかにされていることは示唆的である。『兼葭堂日記』によれば、雅嘉と

11) 管宗次「尾崎雅嘉年譜」（『尾崎雅嘉著述三種』昭和61、臨川書店）。同氏『群書一覽研究』1989、和泉書院。同「木村兼葭堂と尾崎雅嘉——近世浪華町人学者交流」『大坂春秋』第36号、昭和58年。同「群書一覽成立攷」近世文芸47昭和62、10など

兼葭堂が往来を始めたのは寛政十年（1798）七月七日、雅嘉四四歳の時からで、それほど早くからではない。しかしそれ以後、享和元年（1801）年十二月二三日まで、すなわち兼葭堂のなくなるひと月前まで約三年半ほどの間に十七回にわたる往来記事がみえる。その間、雅嘉は兼葭堂にさまざまな書物について質問・借覧を行ったに違いない。そしてそれを取り入れることで『群書一覽』は完成し（享和元年冬至例言）、享和二年に刊行することができた。ただし兼葭堂はその年のはじめになくなり『群書一覽』を見ることはなかったであろう。この間、兼葭堂から教示を得たのは和書に限られたことではなかったと思われる。漢籍の蔵書と知識はさらに一層豊富であったに違いない。『群書一覽』版心には「和書部」とあり、例言にはすでに漢土の書の部の副刻が告げられている。そのためにはこのころ『舶来書目』の編集はほぼ成り、分類編纂へと進めつつあったと考えられる。

『舶来書目』編纂において最も有力な資料入手のルートとして浮上してくるのは、雅嘉の交流範囲ではやはり兼葭堂以外には考えられない。大庭氏が『舶載書目』編者かと想定された飯岡義斎はたしかに大坂の町儒者であったが、先述の理由そして雅嘉との関係も見られず、寛政元年（1789）にはすでになくなっていることからみてやはり該当しないであろう。それでは兼葭堂は『舶来書目』にかかわって、どのような関係を持った可能性があるだろうか。長崎の書物改役向井元仲とは天明四年（1784）・六年に書状のやり取りのあったことが日記から知られ、渡来書資料の作成者を知っていたことはたしかである。しかしその作成になる『大意書』や『商舶齋来書目』は『舶来書目』とは記録の仕方がまったく異質な資料であるとともに、書物改め役向井氏の半ば公的な資料が兼葭堂に直接入手されたとは考えにくい。古梅園の名も『兼葭堂日記』にはしばしば見える。安永八年（1779）八月二十六日から享和元年八月十三日まで十二回の来往があり、昵懇の間柄であった。先の『舶来書目』中の「古梅園蔵本」という注記にも関係するかもしれない。

さて、このような中で、注意されるのは『兼葭堂日記』の次の記事である。

寛政八年（1796）十月「十六（日） 昼時中川飛驒守様御上着 夜恐悦二行」
 「（同）十七 夜中川侯へ面会、夜半帰る」
 「（同）十八早朝 中川侯面会、御暇乞」

これは向井家の記録に基づいて『舶載書目通覽』を編したという長崎奉行中川飛驒守忠英との面談記事である。中川忠英は寛政七年（1795）二月五日長崎奉行に任ぜられ、同年九月十日に着任し、寛政八年九月二十二日まで長崎に在勤し、帰府後、寛政九年二月十二日には勘定奉行に抜擢された¹²⁾。したがってこのときの来坂は長崎から江戸への帰途、滞在したものであった。ただしこのときが初めてではなく前年に一度会っていたと思われる。前年寛政七年の『兼葭堂日記』は欠けているが、同年七月十八日付けの柴野栗山からの兼葭堂宛書状に、このたび長崎奉行中川飛驒守が着任のため、大坂を通行されるが、そのとき「御目に掛け置きたき旨」があるので、旅宿まで訪問してほしいという飛驒守の意向を伝えてい

12) 『寛政重修諸家譜』卷第二百六十二、『清俗紀聞』1（平凡社東洋文庫）村松一弥解説

る¹³⁾。中川忠英は長崎に着く前に蕪葎堂と会って、相談しておきたいことがあったのである。そうして一年余の長崎在勤からの帰途、再び大坂に滞在し蕪葎堂と面談した。蕪葎堂は忠英滞在の間、毎日面会に訪れている。中川忠英が蕪葎堂と会って直接話し合いたいと思ったことは何だったろうか。ひとつはおそらく長崎在勤中に編集した『清俗紀聞』の事であったろう。『清俗紀聞』は当時長崎奉行手付出役として在勤中の近藤重蔵などに指示して、長崎居留中の清客から、その出身地浙江・福建地域の風俗を聞き取って記録させ、多くの図とともに編集して、寛政十一年に刊行されたものである。当時のこの地方の風俗を詳細に記録した白眉の書であるとされる¹⁴⁾。蕪葎堂も中国の風俗文物については造詣深く、大坂では最も語り合える人物であったことは間違いない。

さてもうひとつは何であったか。それは『舶載書目通覧』のことであったのではないだろうか。忠英にとってこの二書は正味一年の長崎在勤中最も貴重な成果であった。おそらく忠英はこれらの稿本を江戸への帰途携えていたであろう。『舶載書目通覧』は、それをさらに分類し書名と撰者だけを書き抜いて『分類舶載書目通覧』二冊を編集した中村亮の識語によれば¹⁵⁾、向井家の記録に基づいて作成された五十六巻からなるものであったという。蕪葎堂は自らも舶載書を多く所蔵し、関心と造詣最も深い人であったから、この書は強く関心を引くものであったろう。この二書を中心とした話題は三日間では尽くされないものだったに違いない。『清俗紀聞』は蕪葎堂生前に出版されたから手にしたであろう。『舶載書目通覧』はその後どうなったのか。現在もその存否は知られない。

雅嘉編『舶来書目』の底本が『舶載書目』であったのか、あるいは中川忠英編の『舶載書目通覧』であったのか、さらにまた別の一本であったのか、見定めることは困難である。『舶来書目』と『舶載書目』とでは元禄七年から宝暦四年の間の渡来書については含まれる内容が同一であり、朱書された底本の巻数は『舶載書目』のそれにほぼ一致している。したがって大庭氏も言われているように、それが底本であった可能性は高い。しかし、(一) 書名が異なること、(二) 『舶載書目』の記載順にくらべ『舶来書目』の記載順の前後関係が錯雑していること、(三) 『舶載書目』は五十八巻であるのに『舶来書目』の底本は「五十五」巻で終となっていたことなど、底本と見るには微妙な相違点がある。同一の出処を持つ本であるが、巻数・記載順など小異を持つ本ではなかったかと想像されるのである。

一方、中川忠英の『舶載書目通覧』五十六巻は向井家の資料に基づいて編集されたものだが、分類等がなされていない無定式なものであったということ以外に知られない。先述のように『舶載書目』はそれと同一のものではないかという指摘は長澤規久也氏によってなされ、大庭氏もほぼ首肯されながら、書名・巻数・内容にわずかの違いが見られることから断定を避けられた。

私も断定する材料を欠くが、雅嘉は中川忠英編『舶載書目通覧』を見た可能性があるのではないかという推測も捨てきれない。それはさきの蕪葎堂と中川氏の出会い、そして雅嘉の蕪葎堂との頻繁な往来から想像するのである。たしかに蕪葎堂と中川忠英との出会いは寛政七・八年であり、雅嘉が蕪葎堂を訪ねはじめるのは寛政十年で、雅嘉は中川氏と直接会うことはなかったであろう。しかし蕪葎堂は『舶

13) 混沌会・木村蕪葎堂顕彰会編『木村蕪葎堂来翰集 先人旧交書牘』169～171頁、2004。5、中尾松泉堂・和泉書院

14) 『清俗紀聞』1・2、平凡社東洋文庫62・70、昭和41・3

15) 『舶載書目』関西大学東西学術研究所資料集7下に附載

『載書目通覧』の写しを作成あるいは入手することはなかったであろうか。蕪葎堂のもとに『舶載書目通覧』の写しがあったことが知られればその可能性はより高くなる。蕪葎堂旧蔵書を示すとみなされている『蕪葎堂書目』や、幕府に買上られ昌平校へ収められた蕪葎堂蔵書を示すとされる『昌平書目』が存在するので検してみた。しかし、その中には見出すことが出来ない¹⁶⁾。また内閣文庫に現存する蕪葎堂献呈本の中にも見出しえない¹⁷⁾。以上のような蕪葎堂関係の書目は旧蔵書のすべてを記したものではないので、蕪葎堂のもとに『舶載書目通覧』の写しはなかったと言いきることも出来ないが、これ以上追求するすべは今のところ見出せない。『舶載書目通覧』の写しが残される場としてはまず江戸——それは『舶載書目』として残された——、そして大坂の可能性が高いのではないかというに留めざるを得ない。しかしいずれにせよ、雅嘉がそれに基づいた写本を机上にみていたことは間違いのないのである。

ところで、文化十年（1813）の自序を持ち、三千数百部の和漢書をいろは順に列挙した『典籍秦鏡』巻一に「写本 舶載書目中川本 全廿七冊」というものが見える¹⁸⁾。これは「中川本」とあるところから見て、中川忠英編『舶載書目通覧』五十六巻を筆写改題のうえ二十七冊に再編したものだったのではなからうか。また東条琴台『近代名家著述目録後編』に中川駿台（忠英）の著述として「舶来書目二十七同追加三」が載る¹⁹⁾。『近世漢学者著述目録大成』に中川駿台の著述として『舶来書目』（二七巻追加三巻）が記されているのはこれによったものであろう²⁰⁾。これも『舶載書目通覧』が『舶来書目』と再編改題され、流布したことがあったことを示すのではないだろうか。いずれも巻冊数は雅嘉の『舶来書目』に近くなっている。『舶載書目通覧』はおそらく複数の人によって筆写され、再編改題されて流布し、一は『舶載書目』として、一は『舶来書目』として流布することがあったのではないだろうか。雅嘉の見ていたものもその一本であった可能性は高い。

なお、『舶来書目』の記載順が年代順ではなく錯雑しているのはなぜか、という問題であるが、おそらく雅嘉は短期間底本を借覧し、その間、自分だけでなく複数の人に依頼して、それぞれの巻を筆写し、急いでそれらを二十四冊に編んだあと、もう一度底本と見比べて、底本の巻数を各該当部分に朱書していったのではないだろうか。記載順が『舶載書目』とくらべ前後関係が錯雑しているのはそのためだったのではないかと思われる。

また『舶来書目』に直接関わらないかもしれないが、中川忠英が抜擢した長崎奉行手付出役として近

16) とともに大阪府立中之島図書館所蔵。『昌平書目』三冊の方が『蕪葎堂書目』二冊よりはるかに多くの書物を収載し、この方が蕪葎堂旧蔵書を示すと一応みなされているが（高梨光司『蕪葎堂小伝』大正15年、蕪葎堂会刊。有坂道子「木村蕪葎堂没後の献本始末」『大阪の歴史』54号、平成11年12月）、『昌平書目』をみるとその冒頭に蕪葎堂蔵書を幕府が買い上げたことを記したあと、「その書、その傍らに朱点し、以て之を別つ」と記されている。実際本書を見ると書名の右に朱点の付された書が散見する。井上智勝氏も言われているが、これが蕪葎堂旧蔵書であって、『昌平書目』は基本的にはやはり昌平坂学問所の蔵書を書き上げたもので、蕪葎堂蔵書全体を示すものではないと私にも思われる（井上智勝「蕪葎堂の蔵書について」（大坂歴史博物館編『なにわ知の巨人 木村蕪葎堂』2003.1思文閣出版）

17) 前掲16井上論文所載「内閣文庫蔵木村蕪葎堂献呈本一覧」

18) 内閣文庫所蔵自筆影印『典籍秦鏡』第一巻、昭和59年10月、ゆまに書房、書誌書目シリーズ15所収

19) 『日本古典全集』第6期、昭和12年

20) 関儀一郎・関義直編『近世漢学者著述目録大成』1941東洋図書刊行会、（復刻版『日本人物情報大系』第48巻、2000）

藤重蔵がいて(寛政七年から同九年まで長崎在勤)²¹⁾、『清俗紀聞』のための聞き取り筆記や作図等を行ったことは、忠英の同書跋文にも書かれているが、『舶載書目通覧』作成にも重蔵は関わったのではないかとと思われる。『好書故事』には長崎奉行の渡来書にかかわる記録なども利用しているからである。重蔵はこの間に得た知識によって『安南紀略藁』『阿媽港紀略藁』などを著したが、のち文化五年に幕府書物奉行となり、『好書故事』『正斎書籍考』『右文故事』等を著わすことになる書誌学者近藤正斎としての素地をも長崎で培ったのではないだろうか。この近藤重蔵も兼葭堂を訪問していたことは司馬江漢の兼葭堂宛書状中に「先達貴宅へよられ申候近藤十蔵ハ蝦夷地へ御用被仰付参候云々」とあるのによって確かめられる²²⁾。寛政九年の『兼葭堂日記』は欠けていて確かめ得ないが、蝦夷地御用を仰せ付けられたのは寛政十年であるから、おそらく寛政九年長崎からの帰途訪ねたのであろう。

また中川氏と大坂とのかかわりで、もうひとり気になる人として中井蕉園(曾弘)がいる。蕉園は中井竹山の長子、文才を囑望されながら享和三年(1803)三七歳で早世したが、寛政十年(1798)江戸へ行き、その滞中に『清俗紀聞』の序を中川氏から依頼されて記している。懐徳堂と中川氏との関係は知られないが、この時期、懐徳堂は兼葭堂と並んで大坂を越えた全国学芸の一中心であった。中川忠英のように学芸に関心ある人であれば懐徳堂の人を招いて面談することもありえただろう。曾弘の序は中川氏による作成の経緯をのべ、とくに浙江・福建地域の風俗を詳記している点について、交易商人にその地域のものが多いため現実的有効性があることを評価するとともに、満州族の支配の及んだ他の地域に比べ、この地域は唐宋の遺風が最もよく残り、経伝の事物を理解する上でも有益であると述べている。序は他に林大学頭述斎と黒沢雪堂(朱子学者黒沢雉岡の子)によって書かれているが、「アクセサリ」的なもので、曾弘の序こそ序文中の本命というべきものと評されている²³⁾。中川忠英は外国の事にかかわる書であったから、一方で昌平黉の林述斎の序を載せてお墨付きをもらい、他方、学問的には大坂懐徳堂の若き俊才の序を依頼したのであろう。忠英にとって当時の大坂は最も学問的に信頼しうる地であったように思われる。『舶載書目通覧』と『舶来書目』との直接的関係については結局不明だが、このような交流の中で、大坂にも写本がもたらされたのではなかっただろうか。雅嘉は『通覧』そのものであったかどうかは別にしても、それに基づいた写本を大坂で見っていたことは間違いないのである。

さて、雅嘉はその後も和学書を中心に精力的な著述活動を継続したが、『舶来書目』を分類して『群書一覽』漢籍部を完成するには至らなかった。この『舶来書目』はその後どのような経緯をたどったのだろうか。管氏の伝によると²⁴⁾、雅嘉は晩年病にかり、歩行や把筆も思うに任せなかったらしい。難波村に退隠したのち、文政十年(1827)十月三日、七三歳でなくなった。子がなく弟谷川于喬がその後を預かったようである。雅嘉の遺稿類を保管整理するとともに、補訂を加えて出版を企図した。書肆敦賀屋九兵衛との関係が生じるのはその間のことであったと見られる。雅嘉生前には敦賀屋からの出版はひと

21) 「近藤守重事蹟考」所収「勤書」、(『近藤正斎全集』第一、明治38年、国書刊行会)

22) 前掲『木村兼葭堂来翰集』244頁

23) 前掲『清俗紀聞』村松一弥「解説」

24) 前掲管宗次「尾崎雅嘉年譜」『群書一覽研究』所収

つもないからである。文政十三年六月『剛定詩学貫珠』小本五冊の上木出願が敦賀屋九兵衛によってなされ、八月には許可されている。しかし未刊に終わらしく現存しない。天保四年秋（天保三年七月出願、同十二月許可）、『百人一首一夕話』九巻九冊が敦賀屋によって刊行された。現在岩波文庫にもあるように雅嘉著述のうち最もポピュラーな書である。弟の谷川于喬が補訂を加えて出版に至ったらしい。その後、遺著が門人によって盗まれ売られるということもあったようで、蘿月庵社中の衰退もあり、弟于喬も兄雅嘉の遺稿類の維持や整理補訂に当たることも困難になったようである。おそらく于喬の歿する前後の時期に遺稿類の一部、すくなくとも『舶来書目』は敦賀屋に委託されたのではないだろうか。于喬（明和四年生）の没年は知られないが七三歳までは健在であったというから²⁵⁾、天保十年以降であろう。そして敦賀屋において『舶来書目』は長い間、「秘藏品」として大切に保管されてきた。大正四年、京大で筆写されたのは敦賀屋松村氏蔵のこの原本であった。そしてその後、本書は松村家から大谷学園へ寄贈されるに至ったのである。敦賀屋は享保期以来大坂を代表する書肆であったが、近代に入っても大阪書籍同業組合長を務め、明治四十二年（1909）には国定教科書翻刻発行会社（のち大坂書籍株式会社）を営み、大坂出版の命脈を保とうとされたが、ついに大正九年、書籍業を廃業された。その後昭和五年（1930）から二十三年まで御当主は大谷女子専門学校学監を勤められ²⁶⁾、さらに昭和四十八年から五十年まで大谷学園の監事の任に当たられ、大谷学園と深いつながりを持たれた。その間所蔵されていた書籍の一部を学園に寄贈されたのであった²⁷⁾。『舶来書目』はその中のひとつだったのである。

おわりに

以上、新出尾崎雅嘉編『舶来書目』について報告と検討を行ってきた。雅嘉は『群書一覽』と併行して、その漢籍部を作成する企図のもとに、中川忠英編『舶載書目通覧』か、それ元にした写本を蕪葭堂かその周辺から入手し、そしてそれ以前に刊行された編纂書を加え、さらに宝暦から寛政期にいたる雅嘉当時までの新たな持渡書資料を入手して、江戸期における渡来漢籍すべてにわたる総合目録を編集しようとしたのである。それが『舶来書目』であるが、それはいわばナマなデータであって、さらにそれを誰もが利用しうるよう分類したかたちのもの——『群書一覽』漢籍部——にしようとし、少なくとも法帖部と地理部に着手していたことは確認された。持渡書資料としては『舶載書目』および既刊の書目に重なるところ多いが、とくに巻六と巻七前半は他に見えない雅嘉が独自に入手した持渡書資料に基づいており、資料的価値は高いと思われる。その部分の紹介についてはまた別に考えたい。

一方、尾崎雅嘉研究にとっては、『群書一覽』はじめ上梓された多くの著述が和書・歌書関係であるため和学者と見られる傾向が強いが、本書によって漢籍についての造詣と関心がそれにまさるとも劣らないほどのものであったことが再認識されよう。雅嘉の漢学教養については奥田元継に学び、安永四年版『浪華郷友録』には「儒家部」に登載されていること、没後に諸家はその伝を語る中で「はたち過るまで

25) 菅宗次「谷川于喬伝記攷」『混沌』第八号昭和五十七年十二月

26) 『尋源』（大谷学園六十年史）p226

27) これらについては大谷学園史『尋源』のほか、松村家御子孫阪田敦子氏からお話を承った。感謝申し上げます。

は、もはら唐まなびにのみこゝろをよせられし」(弟谷川于喬「蘿月庵国書漫抄」跋文)²⁸⁾、「最も漢学にも精し、好んで著述をなす、かたはら歌を詠て最も善す」(川喜多真彦『近世三十六家集略伝』明治元年)²⁹⁾というように、もとの教養は漢学にあったことに触れられていた。そしてその関心は生涯失われなかった。雅嘉には松下見林の『異称日本伝』をついで、日中交渉史の資料を博搜した『続異称日本伝』三百十五巻があり³⁰⁾、「中つ歳より、七十あまり二とせになるてふとしの春まで、書つめられし」ものという(前掲谷川于喬跋文)。また『事物博采』という「伊藤東涯ぬしの名物六帖をよしとして、かれにもれたる事どもかうがへ出されたる」書が八十四巻まで書き継がれて存在する³¹⁾。部門別に項目を立て、和漢書を博搜した百科事典とも言える書であるという。それらについて語られることは少ない。しかしそれらは雅嘉の学問のかたちを最もよく示すものなのではないかと推察される。

実は明治後半、松村家において『舶来書目』二十五冊を実見された人がいた。鹿田松雲堂とともに尾崎雅嘉再評価の先鞭をつけられた幸田成友氏である。幸田氏は明治三十八年稿の「尾崎雅嘉」の中で³²⁾、『舶来書目』は『群書一覽』漢籍部の材料ではあっても、その草稿ではないことをすでに明言されているとともに、雅嘉研究において傾聴すべき見方を示しておられる。氏は雅嘉の多くの和学書を挙げながら、「併し我等が雅嘉を敬慕するのは、その方面からでは無い」とされ、『群書一覽』、『続異称日本伝』、『事物博采』の三書をとくに「畢生の大著」として取上げられ、それらの攷究の必要を示唆されている。

それらの書は、いわば当時の東アジア世界に蓄積された書物知の体系的集積ともいうべき作業である³³⁾。とりわけそれが日本においてどのように蓄積されているかをだれにでもわかるかたちで示すということに雅嘉の意図するところはあったのではないだろうか。おそらく上記三書はそれを最もよく示す書といえよう。『舶来書目』が分類再編されて『群書一覽』漢籍部となっていればさらに一書を加え得たであろう。

附記 『舶来書目』を伝えてこられた松村家の方々、および現所蔵者大阪大谷大学図書館関係者の方々に御高配を賜りありがとうございました。また同大学博物館学芸員池田千尋氏には写真撮影等々種々お世話になりました。厚く御礼申し上げます。

なお本稿は平成26年7月18日関西大学東西学術研究所研究会で報告した内容をもとに成稿したものである。

28) 管宗次「尾崎雅嘉と群書一覽」に翻刻、前掲『群書一覽研究』所収

29) 岩波文庫『百人一首一夕話』古川久解説所引

30) 国会図書館105冊、東大史料編纂所315冊、静嘉堂文庫315巻90冊ほか所蔵、未見

31) 宮内庁書陵部11巻11冊、東京国立博物館41冊、無窮会神習文庫9冊ほか所蔵、未見

32) 幸田成友「尾崎雅嘉」(『書籍月報』第68号、明治38年6月、のち『書誌学の話』日本書誌学大系7所収、青裳堂書店、昭和54年6月)

33) 岡村敬二『江戸の蔵書家たち』(1996講談社)は小山田与清、塙保己一と並んで、尾崎雅嘉を取上げ、書物の集成と分類による「世界」の把握への志向を指摘している。



1 書函収納状態



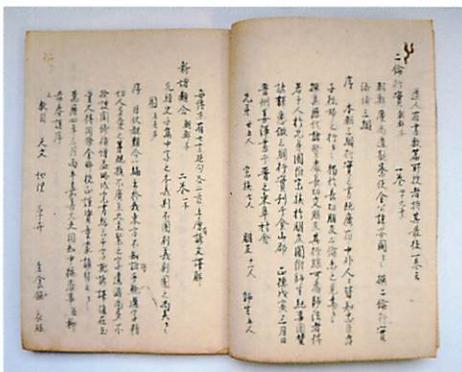
2 巻一表紙



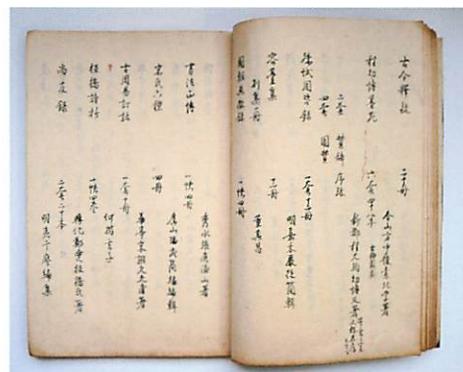
3 巻一、一丁オ



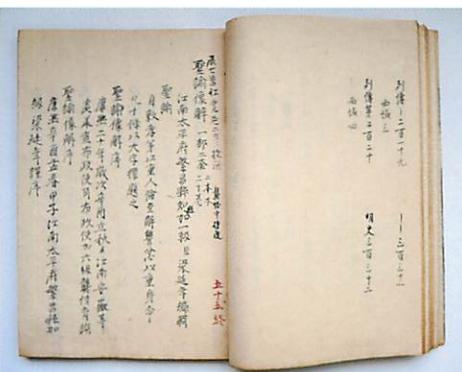
4 巻一、朱書の例



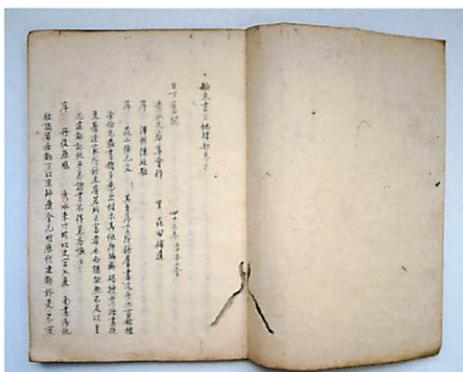
5 巻六、朝鮮本の記載



6 巻七、「古梅園蔵」の注記



7 巻二十四、「五十五終」の朱書



8 別巻、地理部